特集

実践と実績にクローズアップ

「秋田式」に学ぶ よりよい指導のポイント

全国学力・学習状況調査で毎年全国トップの結果を出し続けている秋田県は、つねに全国の小学校の先生から注目を集めています。本誌では、秋田県の学力向上の取り組みについて、実際に改革にあたってきた方々を取材。これまでの歩みと、授業実践、授業研究、家庭学習など様々な場面での工夫について紹介します。

取材・文●甲斐ゆかり（サード・アイ）　イラスト●あきんこ

子どもの学力を伸ばす 秋田の秘密とは

2015年の「全国学力・学習状況調査」で、秋田県は例年に続いて全国トップレベルの結果を出しました。「秋田の教育はすごい」という評判は、学校関係者なら誰もが知っている事実となっています。

学力調査の結果、全国的には、「知識に関する問題（A問題）」よりも、「活用に関する問題（B問題）」の得点が低いことが課題となっているのにもかかわらず、秋田県では逆に、B問題の得点が全国平均を大きく上回る傾向にあります。つまり、秋田県の子どもたちは、身につけた知識や技術を活用して課題を解決する「活用力」にすぐれているといえます。秋田県の教育がとりわけ注目されるのはそのためです。

このような結果を生み出す要因として、次のようなことがあるといわれています。

①子どもたちが落ち着いて学習している

学力調査の結果からも、秋田県の子どもたちは授業中私語が少なく落ち着いていて、熱心に学習している割合が高いことがわかっています。

②学習体制がきめ細かい

放課後を利用した補充的学習を行う学校の割合が全国平均を上回っており、少人数学習も早くから行われています。

③探究型の授業を行っている

秋田県では、学習の目的をもち、学習課題についてグループで話し合ったり、学級全体で意見交換をしたりして課題を解決する「探究型」の授業が行われています。授業の見通しをもたせるための「めあて・学習課題」の提示や「振り返り」の活動を入れることにより、今日の授業で何が身についたのかが実感できる授業スタイルが最大の特徴で、学力を支える大きな要因となっています。

④家庭学習の習慣が定着している

家で学校の復習をしている子どもの割合は9割を超え、全国平均を大きく上回っています。一方、学習塾に通う割合は全国平均を下回っており、家庭学習の習慣がしっかりと身についていることがわかります。背景には、教師の保護者への働きかけや、計画的な学習に向けた具体的な指導が充実していることが挙げられます。

⑤家庭・地域・学校の連携が強い

秋田県では、PTAや地域の人が学校の様々な行事に参加する割合が非常に高くなっています。同様に、保護者の授業参観や運動会などへの参加率も高く、家庭・地域・学校の強い連携が保たれています。

⑥授業研究が活発に行われている

校内授業研修会や小中連携授業研修会、地域（市町村）授業研修会などが充実しており、指導における教師間の共通理解が浸透しています。また、県教育委員会や大学との連携も密にとられ、教師や学校を支援する様々な行政上の施策も試みられています。

これらのことを踏まえつつ、次のページから、秋田県の教育に携わる方々のお話をうかがっていきます。

秋田県が全国1の学力を生み出す背景

●全国学力・学習状況調査　秋田県の平均正答率（全国平均と比較）

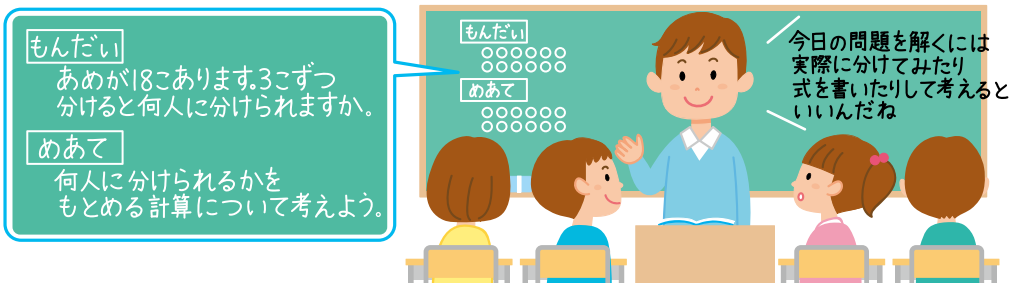
	国語		算数		理科
	A問題	B問題	A問題	B問題	
2013年度	71.7(+9.0) 全国1位	59.1(+9.7) 全国1位	82.8(+5.6) 全国1位	67.1(+8.7) 全国1位	–
2014年度	77.4(+4.5) 全国1位	67.3(+11.8) 全国1位	85.1(+7.0) 全国1位	66.2(+8.0) 全国1位	–
2015年度	76.0(+6.0) 全国1位	76.4(+11.0) 全国1位	81.2(+6.0) 全国1位	51.5(+6.5) 全国1位	66.7(+5.9) 全国3位

（全国学力・学習状況調査より）

秋田の「探究型授業」

導入

めあて・課題の設定



★授業の始めに目標（めあて・ねらい）が示される。

児童　＋23.3　｜　学校　＋26.6

（「当てはまる」「よく行った」と回答したもののみを集計。「＋」の数値は児童・学校質問紙の全国平均との差）

展開

自力解決

（子ども一人ひとりの思考）

★授業では、自分の考えを発表する機会が与えられている。

児童　＋10.9　｜　学校　＋14.8

グループでの学び合い

（話し合い・意見交換・討論）

★友だちとの間で話し合う活動をよく行っている。

児童　＋14.3　｜　学校　＋17.5

学級全体での学び合い（グループの発表→話し合い・意見交換・討論）

終末

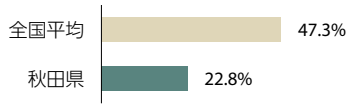
まとめ・振り返り

★最後に授業内容を振り返る活動を行っている。

児童　＋21.8　｜　学校　＋30.3

●充実した家庭学習

▶塾に通っている子どもの割合



▶家で学校の授業の復習をしている割合

（「している」「どちらかといえばしている」の合計）

（2015年全国学力・学習状況調査より）

「秋田型」教育をサポート 自治体の取り組み

ここでは、秋田の教育を行政の面から支える、秋田県の取り組みを紹介します。

校内研修会の様子。
（鹿角市立花輪小学校）

お話をうかがったのは

秋田県教育庁
義務教育課
副主幹兼班長
工藤 真弘 先生
Masahiro Kudo

全員が組織的に動いて授業の質を保っている

2007年に始まった「全国学力・学習状況調査」で、秋田県がトップに立ったことで、その教育内容に注目が集まりました。そこで、県での実践を整理してみたところ、探究型の授業が要因の一つとして挙がってきました。

その結果、探究型の授業は大いに注目を集めたのですが、秋田県の先生にとっては、学習指導要領で示された内容を忠実に実践しているだけであって、特別に変わったことをしているわけではないというのが実感だと思います。先生方にとっては、ごく当たり前のことをやっているだけなのです。

ただ、他県の先生からよく指摘されるのは、「秋田県では、どこの学校に行っても同じ指導をされていますね」ということです。これは、秋田県の研究体制が組織的だからだと思います。秋田県では、授業改善が個の力量によって行われるのでなく、学校全体で共通のテーマをもち、共通理解のもとに進められています。先生方の同僚性の高さもプラスに影響しているでしょう。

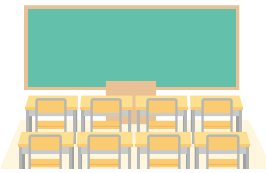
一般的に授業研究は、「専門外の教科には口を出さない」という暗黙のルールがあります。ですが、秋田県では、研究の成果を全体で共有する体制が整っています。「ある教科でうまくいっていることが他の教科ではなぜうまくいかないか」、「この実践の成果は、他の学年ではどう生きるか」など、教科や学年を超えた検証改善のサイクルが各学校で進められているので、どの先生も同じように指導ができるのです。一部のやる気のある先生だけが頑張るのではなく、全員でやることで、授業の質が一定以上に保たれているのだと思います。

授業実践において、「全国学力・学習状況調査」の学校質問紙と児童質問紙の回答結果の差が少ないのも秋田の特徴です。このことからも、秋田県では探究型のスタイルが機能しているといえるでしょう。

秋田県　学力向上への取り組み

1 少人数学習推進事業（2001年～）

▶子どもの多様性に応える教育を行うため、30人程度の学級編成を実施。現在は6年生をのぞく全ての学年で実現。きめ細かい指導の一層の充実を図っている。

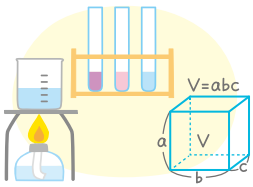


2 学習状況調査（2002年～）

▶「全国学力・学習状況調査」とは別に、県独自の調査を実施。悉皆で、４年生から中学2年生まで。教科は、4年生は国語、算数、理科、５・６年生は国語、算数、理科、社会。あわせて学習への意欲などについて質問紙による調査も行う。実施は毎年12月。

3 算数・数学学力向上推進事業（2005～2010年）
理数学力向上推進事業（2010～2012年）
学力向上支援事業（2014年～）

▶知識や技能を確実に習得するとともに、思考力、表現力などにすぐれ、理数系の進路などに夢や希望をもった児童生徒を育てることを目指し、学力向上を推進する事業を実施。



4 教育専門監の配置（2006年～）
教科指導CT（中核教員）養成研修会（2015年～）

▶教科指導に卓越した力をもつ教師を「教育専門監」に任命。複数の学校でティームティーチングによる授業実践などを通し、教育技術の向上を図る。さらに国語・算数・理科でCT（Core Teacher）による教科研究会での授業提示、教科指導の情報提供や支援を行う。

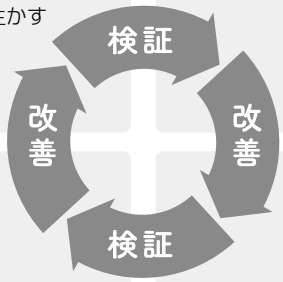
学力調査・入試を一体化して活用するPDCAサイクル

4月 全国学力・学習状況調査

●問題分析：
☞求められる力、授業改善の方向を確認
●各校で自己採点：
☞個別指導や授業改善に生かす

8月 結果公表

●客観的分析、対策の明確化



●次年度へ　各校で改善状況を把握
●各学校での見届け

3月 高校入試

●県の課題の改善状況の把握

12月 学習状況調査（県）

▶秋田県では、県独自の学習状況調査に加え、全国学力・学習状況調査、高校入試を一体としてとらえた検証改善のサイクルが確立しています。4月に全国学力・学習状況調査が終わると、学校・市町村単位で自己採点し（任意）、県が開設する「学力向上支援Web」に入力。暫定的な結果のほか個人票も出力可能で、夏休み前の面談等に活用されます。課題は12月の学習状況調査の結果により検討され、高校入試まで含めて授業改善に生かされます。

学力の高さだけでなく心の豊かさに注目してほしい

秋田の子どもたちは、行事によく参加するなど地域への関心も高く、また地域へ貢献したい気持ちも強くもっています。それは家庭と地域のつながりが強く、安心して暮らせるからでしょう。県では、このような、地域・家庭を含めた教育環境の良さを、「七つのはぐくみ」として発信しています。

一方、秋田の子どもたちは、学校の中や地域の人たちとは活発にコミュニケーションを取れるものの、コミュニティ「外」の人たちと接することがあまり得意ではないという面ももっています。グローバル化が進むこの先の社会を考えると、国際的な視野はまだ弱いといえるでしょう。そのような面からも、県では〝「問い」を発する子ども〟の育成を最重点の教育課題に掲げました。

ところで先ほど、地域の人との「つながり」の強さが秋田の子どもの特徴であることにふれましたが、調査によると、人とのつながりの強さと学力の高さには相関関係があることがわかっています。学力の高さと経済力の関連性はよく引き合いに出されますが、長年培ってきた地域の人々のつながりは、お金では買えない貴重な財産といえるでしょう。

一般的には「秋田の学力」というと、すぐに教科の得点のほうに注目が集まります。しかし、むしろ注目してもらいたいのは、子どもたちの規範意識や自己肯定感の高さです。「全国学力・学習状況調査」の児童質問紙では、「学校のルールを守る」「いじめはいけないことだ」「自分にはいいところがある」「将来の夢がある」などの項目が全国平均を上回っています。これらは、地域の人々の支えの中で培われていくもの。秋田の子どもたちの学力の高さは、教育環境の豊かさを下地に、しっかりとした規範意識や自己肯定感をもち、前向きに生活できているからこそ実現できているのです。

秋田の先生方は、授業改善はもちろん、生活指導についても、子どもを支える車の両輪として力を入れています。その成果はまちがいなく子どもの姿として表れていると思います。

秋田わか杉　七つの「はぐくみ」

一　早寝　早起き　朝ごはん
　　生活リズムは全ての基本
二　元気なあいさつ　明るい返事
　　規則　約束　守るわか杉
三　読んで　話して　書いて　高める
　　「問い」を発する思案力
四　問題解決　子どもが主体
　　授業の続きは家庭で学習
五　職場体験　インターンシップ
　　地域で育む子どものキャリア
六　学校や地域の話題で語り合い
　　将来の夢　家族でえがく
七　ふるさとを支える自覚と志
　　みんなでつくる未来の秋田

（秋田県教育委員会）

秋田の先生を支えているのは組織化された共同研究

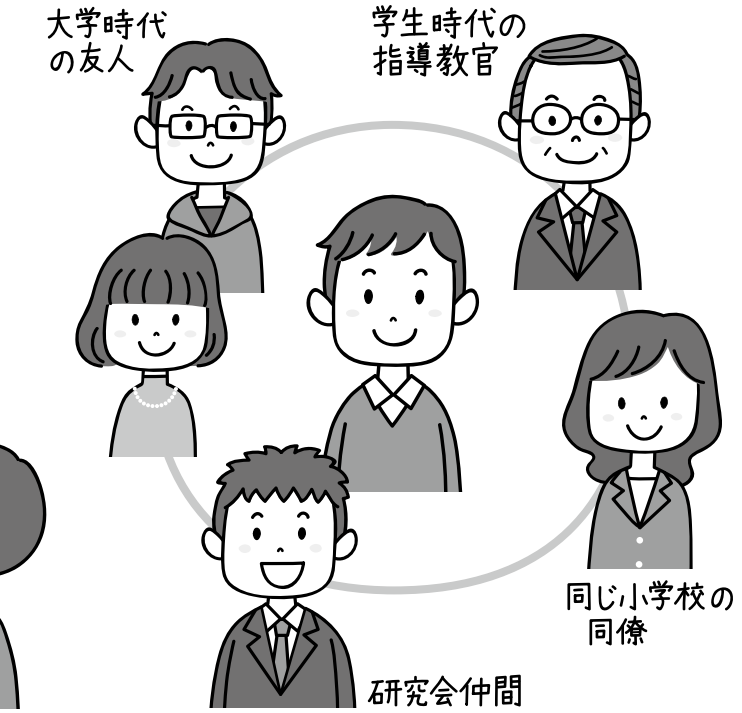
秋田県の特徴は、先生方が共同研究を行うチャンスが大変多いことです。学校単位、市町村単位でも共通しています。

いわゆる「秋田型」といわれる「探究型授業」では、質の高い教材研究・指導計画が求められます。「探究型授業」が実現できているのは、先生方がスキルアップできる機会が多く設けられているからです。

授業研究が活性化していることは、「全国学力・学習状況調査」の学校質問紙の分析からもわかります。教職員の情報共有に関する項目は、全国平均を大きく上回っています。また、児童・生徒質問紙でも、秋田県の子どもの「教科が好き」「勉強がよくわかる」という割合は、右肩上がりで上昇しています。

秋田県の授業研究では、「この学習課題で本当によかったのか」「3回目のグループ討論は本当に意味があったのか」「あの場面でもう一度グループで話し合わせたほうがよかった」など、厳しいやりとりが行われます。その中で、先生が授業の力量を磨き、力をつけているのだと思います。校長のリーダーシップが機能し、研究主任が自由に動ける体制になっていることも特徴です。

ふだんから学校の課題や状況を教師全員で共有し、課題を出し合ったり情報提供を行ったりしている土壌が、研究、そして授業の質を支えているのです。



「秋田スタイル」から学ぶこと

最後に、秋田大学教育文化学部教授で、秋田県学力テストの検証改善委員会委員長を務める阿部昇先生にアドバイスをいただきました。

お話をうかがったのは

秋田大学
教育文化学部教授
阿部 昇 先生
Noboru Abe

自らを支えるネットワークづくりがこれからのカギになる

秋田を参考に、他県の若い先生が自分の学校でいきなり全てを変えようと働きかけても難しい場合があります。それなら、同じ学校の若い先生同士、あるいは、別の学校に勤務する大学時代の同窓生などで、小さな研究会をつくることから始めてみてはどうでしょうか。小規模でも、3人集まれば立派な研究会です。研修や外部の大会で知り合った先生もよいでしょう。とにかく仲間をつくることです。

というのは、いくら志が高くても、一人で授業研究を行うことには限界があるからです。私の知る限り、授業のうまい先生は、研究仲間の中で若い頃から切磋琢磨して力量を上げてきた方ばかり。私自身も、中・高の教員時代は、先生同士の研究会を通して自らのあり方を見直したり技量を深めたりして、必要なことのほとんどを学んできました。

これからは、例えばインターネットを使って、離れた場所の仲間たちとやりとりをするのも一つの方法として考えられます。また、年齢や校種に関係なく、多様なつながりをつくることでもバックグラウンドが豊かになります。いろんな仲間の作り方を試してみて、ネットワークを拡げていってください。

黙っていても誰かが手を差し伸べてくれる環境ばかりではありません。仲間をつくるために自分から働きかけることが大事だと思います。

「探究型授業」と「アクティブ・ラーニング」の関係

これから先、PISAで求められているような問題解決力や価値創造力、判断力といった能力を身につけるには、子どもが自ら身につけた知識を活用したり、物事を多面的に見たりしていくことが求められてきます。

「この部分は理解できるけれど、ここは納得できない」とか、「他にこういうやり方もあるぞ」といったように、子どもが主体的に考え、自分なりの答えを導き出していく学習では、今までより高度に知的な思考が展開されます。そのため、従来のような知識伝授型の授業では、うまくいかない部分が多くなってきます。今、文部科学省が「アクティブ・ラーニング」を提唱しているのは、そのような理由があるからともいえます。

アクティブ・ラーニングと、秋田県の「探究型授業」は、多くの部分がシンクロしています。これから全国でどんな実践が出てくるか注目していますが、先行してやってきた秋田県は、一つのモデルになると思います。

話は変わりますが、先生方が授業研究会で課題を検討したり、共通の課題をどう解決するかを考えたりする過程には、「探究型授業」との共通点が多くあります。秋田県の先生方の力量が優れているのは、授業研究の場面で自ら「探究型」を実践しているからともいえるでしょう。

*アクティブ・ラーニング…子どもの能動的な参加を取り入れた学習法の総称。

**“自ら交流の場を求め
仲間を増やすことが
教師としての力量に繋がります”**

「秋田スタイル」は海外にも拡がっている

公教育がしっかりと機能している秋田県は、海外からも注目を集めています。

例えばフィンランド。教育水準が高く、若者がもっともなりたい職業が「教師」という国です。そのぶん、競争率も高く、高い力量が求められることで知られています。

そんなフィンランドと秋田の授業には共通する点が多くあります。フィンランドから秋田に視察に来た大学教授は、秋田の「探究型授業」を高く評価していました。また、秋田で行われている校内研修のシステムをフィンランドでも取り入れたいと言っていました。

また、東アジアの国々も関心をもっています。教育熱心なことで知られる韓国では、近年、国内での公教育の役割の低下が叫ばれています。そこで、秋田県の「探究型授業」を通訳付きで公開したところ、非常に大きな反響がありました。秋田県の教育についてまとめた著書『頭がいい子の生活習慣』は、韓国、台湾、中国本土で翻訳・出版され、好評を博しています。

さらに今後は、タイとの教育交流が予定されています。秋田の「探究型授業」をタイ語に訳して実践し、共同研究を行うのです。相手国のタイはもちろんですが、秋田県の先生方にも、「秋田スタイル」の良さを再認識してもらう、よい機会になると期待しています。